

梁啓超と日本

——福沢諭吉の啓蒙思想との関連を中心に——

馮 寶 華

はじめに

梁啓超（一八七三—一九二九）は、中国の近代史における精力的な啓蒙的思想家であり、また中国の近代小説や新詩の地位を高めた文学者でもある。青年時代から、清末の中国社会の現実的諸問題を心にかけていた梁啓超は、日清戦争の敗戦の後、清政府に対して不満を持ち、一八九五年以後、師康有為⁽¹⁾と共に変法維新を主張した。さらに、一八九六年には、上海で『時務報』⁽²⁾を主宰し、戊戌変法を推進した。一八九八年、戊戌政変によって変法運動が挫折したため、梁啓超は日本に亡命し、『清議報』⁽³⁾、『新民叢報』⁽⁴⁾、『新小説』⁽⁵⁾などの雑誌を創刊した。横浜を活動の拠点として政治・哲学・史学・文学・教育問題・婦女問題などを説き、多くの東西近代思想家の学説を中国の読者に紹介した彼は、当時、海外における雑誌の発刊の創始者でもあったのである。

梁啓超が日本に亡命した時期は、ちょうど明治の時代であった。彼は、明治維新によって急速に近代化した日本を実際に見て非常に驚き、また明治の日本文化に憧れるようになったと述懐している⁽⁶⁾。当時、明治の文化の最大の特徴の一つは外来文化を積極的に受容していたことであり、梁啓超は日本を介して、西洋からの情報をいち早く受信することができた。明治に現れた新文化の中で、彼が特に関心を持ったのは、このような日本が受容した西洋の近代文化と思想であった。日本において、東西の近代文明に自由に触れ得た彼は、中国の国民性の改造が必要だと痛感し、創刊した雑誌を通じて盛んな啓蒙活動を展開した。一九〇二年からの数年間は、梁啓超の思想が開放的になり、論文が量的にも質的にも最も優れ、彼の啓蒙思想の最盛期だったと言える。特に『新民叢報』は、中国の青年達に大きな影響を及ぼし、一冊ごとに、中国内地で十数種の複製版があったほどであり、一九〇六年、上海の

支店では一万四千余部の販売量にも達した⁽⁸⁾。

従来、梁啓超自身の政治小説と日本の政治小説との関係については研究されてきたが⁽⁹⁾、日中兩國の学者によって明治の日本文化と梁啓超の関係についての論文が書かれ始めたのは最近のことであり⁽¹⁰⁾、特に福沢諭吉と梁啓超の啓蒙思想の共通性と相違について、詳しい言及を行ったものはあまりない。

梁啓超は一生の言論活動の範圍が広く、政治・文学・哲学・教育など多方面に言及を行ったが、本稿では特に、彼が明治の日本文化に対して、どのような気持ちを持ち、雑誌を通じて、どのように日本の啓蒙思想家としての福沢諭吉を紹介したかという点に限定し、中国の近代において梁啓超の果たした啓蒙家としての役割を検討したいと思う。

1、明治文化との接触

一八九八年九月二十一日に戊戌政変が起こり、梁啓超は日本大使館に助けを求めた。日本政府は梁啓超の日本への亡命の要求に応じて、十月三日に梁啓超を日本の軍艦「大島丸」に乗せ、十月二十日に広島を経て東京に着いた⁽¹¹⁾。彼は妻に宛てた手紙で「私はこの政府に面倒を見ていただいて、すべては豊富だし、便利だし、食事や寝起きに関しては、まるで家にいるようです。」⁽¹²⁾(引用者訳、以下引用文は特記がなければ、引用者訳)と述べた。日常生活が落ち着いてから、彼は間も

無く志賀重昂、犬養毅などの政界の有名人と交流し、柏原文太郎、高田早苗など日本の友達もできた。日本で生活し、色々な日本人に会った梁啓超は、当時の明治日本に対する印象について次のように述べている。

日本に亡命した時、上昇している新しい国を実際に見て、まるで明け方の風を呼吸するようで、頭も体もすっきりして気持ちがよかった。この役人から職人まで、希望を持って活躍し、勤勉進取の氣風に満ちた全てが、昔から無名の小国を新世紀の文明の舞台に立ちあがらせた。腐敗している清政府を振り返って見ると、活力がなく積極性に欠けている。兩國を比較し、日本人を愛すべき、慕うべきだどつくづく感じた⁽¹³⁾。

日本に来る前の梁啓超は日本人に会うとき、中国語で書くことによってコミュニケーションするしかなかった。来日後、新しい知識を吸収するため、日本の書物を読むようになりたいと思った。それ故、日本に着き次第、梁啓超より一年ほど早く来日した羅普に、日本語を学び手取り早い方法を教わった。それは中国語文法に逆らって読むという方法だった。「初心者はこの方法によって、日本文の書物はほぼ分かるようになる。このように、『和文漢読法』という本を書き上げた」⁽¹⁴⁾

と羅普は記述した。日本文を習得した梁啓超は、大量に書物を読んだ。彼はいかに精神的に満足したかについて、『清議報』でこのように書いた。

日本文を学び、日本の書物を読み、今まで見たことのない本が続々と目に入り、今まで勉強したことのない学説を頭に入れた。まるで暗い室に日が差し込んできたようになるくなり、久しぶりお酒を口にしたように満足し、うれしかった。⁽¹⁵⁾

梁啓超は日本語が大いに役に立つものだと思ったので、これを自分だけのものにせず、中国人皆のものになることを望み、「日本文を学ぶ利益を論じる」という文章を書いた。

日本は維新以来三十年、知識を広く世界に求めて、翻訳したり書いたりした有用な書物が数千種を下らない。なかでも政治学・経済学・哲学・社会学などは、民智を開き、国の基を強くするための急務である。わが国では、西学者があまりいなくて、兵学・技術の書物ばかり翻訳されて、政治・経済など基本的な本はめったにない。(中略)現にわが国の翻訳者は休みなく翻訳の作業に努めているが、翻訳されてから読むのでは遅いし数も少なくて、日本文を学んで

読む速さと多さに比較できないほどだ。それ故、私はわが国の人に日本文を学ぶことを勧める。⁽¹⁶⁾

『新民叢報』の内容を見れば、梁啓超の日本の明治文化受容の様相が窺えよう。明治日本の近代化の成功は主に西洋からの学習の結果で、中国は日本のような成功に達するために、西洋の文化を学ばなければならぬと梁啓超は考えた。しかし、膨大な原典を学ぶことは時間がかかるし、障害もあるから、むしろ日本が選んだものの中から習ったほうが経済的に受益を得やすいと梁啓超は思った。それ故、『新民叢報』で紹介された西洋思想や学説は、日本においてかつて人気があったものばかりである。例えば、一八七一年にスマイルズの『セルフ・ヘルプ』が中村正直によって『西国立志編』として刊行された。梁啓超は『自助論』の題名でその本を紹介し、中村正直の書いた七つの序を全て収録した。これは日本を視野に入れて西洋文化を受容した証拠と言えよう。さらに注意すべきことは、梁啓超は日本の書物を介して西洋の文化を摂取しつつ、日本の思想家の理論をも受容したことである。例えば、『清議報』や『新民叢報』で執筆した文章では、徳富蘇峰、中江兆民、加藤弘之、福沢諭吉などの日本の思想家の学説を援用しながら、自分の議論を展開した。梁啓超の思想を窺う上で、最も重要な文章は、『新民叢報』に掲載された「新民説」

である。「新民説」の理論は福沢諭吉の啓蒙思想に非常に似ているので、梁啓超は福沢諭吉の文明論の思想を受けたと考えられる。後ほど、梁啓超と福沢諭吉の思想の関係について詳細に検討したいと思う。

2、福沢諭吉の思想の紹介と評価

日本で創刊した『清議報』や『新民叢報』で梁啓超は複数のペンネームを使って、合わせて百篇余りの論文を発表したり、東西の哲学思想を紹介したりした。日本の状況を説明する時、福沢諭吉の思想を例として取り上げたことが少なくない。しかも、福沢諭吉の生涯を比較的詳細に紹介し、明治維新における福沢諭吉の啓蒙活動を高く評価した。以下は梁啓超が兩雜誌で福沢諭吉について言及したことをまとめたものである。

(A) 生涯の紹介

知識や学問について書いた文章では、外国の思想を取り入れて同胞に幸福をもたらした世界の啓蒙的思想家のなかで、フランスのヴォルテール、日本の福沢諭吉、ロシアのトルストイをそのトップとして賞嘆し、三人の生涯や功績を紹介している。福沢諭吉の生涯は、次のように紹介されていた。

福沢諭吉は明治維新以前に先生から教えをうけることなく、英語を独学し、かつては中英辞典を写本したことがある。また独力で学校を創設して慶応義塾と命名し、さらに新聞社を開設して時事新報と命名したが、現在では日本を代表する私立学校と新聞社になっている。訳書は数十種あり、もっぱら欧米の文明思想を受容することを主している。日本人が洋学に接したのは福沢諭吉より始まったのである。その維新改革の事業はその六、七割が福沢諭吉が関与したものであった。⁽¹⁷⁾

(鳥井克之訳 下峯道「福沢諭吉」『近代日本の哲学者』北樹出版 一九九〇年 一二〇頁)

その後、『新民叢報』第七号でも、巻頭に「日本維新における偉大な二人」という題名で、西郷隆盛や福沢諭吉の写真を添えて、二人の貢献を紹介していた。⁽¹⁸⁾ 以上の文章を見れば、梁啓超が福沢諭吉についてよく知っていたことが分かる。特に、福沢諭吉が国民に西洋の学問を紹介した努力や教育の貢献を重視した。

(B) 福沢諭吉の思想の評価

梁啓超は「文明を伝播する三つの強力な手段」という文章のなかで、犬養毅が彼に福沢諭吉について話したことを以下

犬養堂は私に「日本の維新以来、文明を普及させる方法としては一に学校、二は新聞、三は演説という三つがある。およそ国民に字を知る者が多ければ、新聞を利用すべきであり、国民に字を知る者が少なければ、演説を利用すべきである。日本における演説の習慣は福沢諭吉(福沢氏は日本の洋学の第一人者中の先駆者であり、いまなお生存され、当今の巨頭である)に始まる。彼が創設した慶応義塾においてそれを広めたが、当時は怪者など見なされていた。その後、嚶鳴社なる組織が現われ、もっぱら演説を行ない、その風習がすでに広まり、今日ではおよそ集会が開かれれば、必ず演説する者がおり、たとえ数人の者が集い宴会を催せば、やはり演説する者が必ずいるという状態になった。これこそ実に文明進歩を助ける強力な手段である。」と語ったことがある。中国では近年來、学校、新聞の利益について知る者が多い。だが、演説の利益について知る者は極めて少ない。去年、湖南省の南学会、北京の保国会とともに西洋人の演説グループに習ったものである。湖南の風氣が急速に高まったのは、実にこの力によるものである。ただ惜むらくは長く存続せず、間もなくすたれてしまったのである。今日、志のある者はやはりこれに力を尽すべきである。⁽¹⁹⁾

この文章からは、梁啓超が日本の友人に福沢諭吉について教えてもらい、当時の日本人の福沢諭吉に対する評価を受け入れ、彼を「日本の洋学の第一人者中の先駆者」、「当今の巨頭」として中国の読者に紹介していることが分かる。さらに、より重要なことは、梁啓超が福沢諭吉の思想を利用し、自分の国でも同じような改革が行なわれるように願っていたのが見てとれることである。さらに、教育の目標を定めるべきことを主張していたある文章のなかで、梁啓超は福沢諭吉を非常に高く評価した。彼は中国の教育が盛んでなかったことを嘆き、政府だけをたのみに教育を普及させるのではなく、個人の力でも教育を押し広めることを主張した。彼は日本の状況を例として挙げ、次のように慨歎していた。

日本の福沢諭吉は、ただの平民であり、一生政府の官職に就いたことなかったが、日本の教育の推動者となっている。(中略)我が国には今に至るも福沢諭吉の如き人物が存しない。⁽²⁰⁾

3、福沢諭吉・梁啓超の啓蒙思想の比較

アンリ・ベルナールは、梁啓超が福沢諭吉の数多くの著作

ならびに東京大学の総長（一八八六年以後）になった加藤弘之の著作を精一杯に吸収したと指摘している。⁽²¹⁾ 梁啓超自身は福沢諭吉の文章をどのぐらい読んだかという記述を残さなかつたようだが、彼の主宰した『清議報』や『新民叢報』のなかで、確かに福沢諭吉の「男女交際論」と「福翁百話」の文章が中国語に翻訳され、編集されて刊行された。しかも、『新民叢報』で創刊号より続々と掲載された「新民説」の内容は、福沢諭吉の『文明論之概略』の思想と似ている部分が多い。従来、梁啓超と福沢諭吉に思想的影響関係があると指摘した論文は少なくないが、詳しい検討はあまりなされなかつた。以下では「新民説」の主要思想を中心に、『文明論之概略』のなかで、どの思想を受け取ったと推測できるか検討してみようと思う。

「新民説一」叙論では、国は国民一人ひとりが集まって成ったものであり、弱く愚かな国民ばかり集められれば、国にならないのに対して、獨立し智慧がある国民を集められれば、一国に成ると論じた。現在のアメリカやイギリスが世界を左右するほど強い国として立ち上がった理由は国民全体の強さにあり、中国は貧弱な状態を抜け出し、欧米列強に追い付くために、すべての国民の維新が重要であることを強調した。

「新民説二」では公德、国家思想、進取冒險、權利思想、自

由、自治、進歩、自尊、合群、生利分利、毅力、義務思想、尚武、私徳、民氣、政治能力併せて二十五篇の新民方法について書いた。題名はそれぞれ違うが、全体として精神面と道德面を大きなテーマとして国民の問題を提起した。

また、『新民叢報』の「発刊の辭」でも新民について、上記の文章とほぼ同じことを書いている。

本報は大学新民の義を取る。吾が国を維新せんと欲すれば、當に先ず吾が民を維新すべし。中国の振わざる所以は、国民の公德缺乏し、智慧開けざるによる。故に本報は、専ら此の病に対して之を薬治せんとし、中西道德を採合して以て德育の方針となし、政学理論を廣羅して以て智育の原本となすことに務む。⁽²²⁾

（野村浩一訳『近代中国の政治と思想』 筑摩書房 一六八—一六九頁）

これらを見れば、梁啓超が中国の国民に欠けているものは智慧と道德だと考えていたことがわかる。新民を作る方法は何によりも智育と德育である。福沢諭吉の『文明論之概略』では、第四章から第七章まで、文明の国に達するために必要な、国民の智徳に関して論じている。両書の内容を対照して読めば、両者の思想の共通点が具体的に読み取られる。

まず、「文明論之概略緒言」の冒頭では、一人の精神發達を論じるのではなく、国民全体の精神發達を一体に集めて、その一体の發達を論じる文明論の趣意を明らかにする。嘉永年中、ペルリが来日し、日本の人民は始めて西洋を知り、西洋の文明と比べて大きな差異があることを知り、非常に驚いた。人心の騒乱のなかで、全国の人民は文明に進もうと目指し、西洋文明に追い付き、追い抜こうと奮発していたと指摘した。それ故、現在の西洋文明は最善だとは言えないけれども、半開の国にならず、一國文明の進歩を図るためには、ヨーロッパの文明を目的として議論する必要がある。文明は外に現われる物事と内に存する精神のことであり、外の文明は取りやすく、内の文明は求めにくいので、國の文明の進歩のため、難しい方を先に取って易しい方を後に求めることが肝心である。精神は人心の氣風であり、同時に欧亚二州の差異の原因となるものである。そのため、西洋文明に習わなければならぬ訳である(第二章)。注意したいことは、福沢諭吉と梁啓超とも自説の冒頭での討論の対象は一人の國民ではなく國民全体としていることである。一國の進歩が一人か二人に頼るわけではなく、全國の國民の氣風によって決まると両者は巻頭ではっきり指摘した。

次に、第三章では、文明とは人の安樂と品位との進歩であり、その二つのことを獲得するため、人の智徳が必要だと指

摘される。第四章から第七章まででは、智徳について詳しく論じられる。(第六章での、智と徳の定義や國家に対する兩者の相互作用の論点については梁啓超が『新民説』の「論公德」で同じような意見を述べている。) 福沢諭吉によれば、徳は英語でモラル、心の行儀のことであり、智は英語でインテレクト、物事を考え、解し、合点する働きであると定義される。しかも、徳は一心の内に属するものという私徳と、外物に接して人間の交際上に現れる働きという公德の二つに分けられ、智は物の理を究めてこれに応じるの働きという私智と、人事の輕重を分別し、緊急性の度合いを察する働きという公智にさらに分けられる。日本の國民が私徳のこのみを重視し、公德の更に貴ぶべきものを徳の条目に加えず無視していたので、徳の觀念を狭く考えていたと福沢諭吉は指摘する。一國の文明を進歩させるため、國民の公と私徳を偏らずに強調しなければならぬ。また、徳は世界中に通用して至善なものといえども、世の沿革に従ってこれを用いる場所と時節を選び、これを用いる法を工夫すべきであると福沢諭吉は言う。

一方、梁啓超の「新民説二」では、中國の國民に最も欠けているのは公德であると指摘される。公德は人間社会の社会たるゆえん、國家の國家たるに欠かせざるものであり、この徳によって國家が成り立っているのである。道德の本体はただ一つであり、外に向かつて現われるならば、公私の名がつ

き、人が自身を良くしようとすることを私徳と言い、人間がお互いにその社会を良くしようとするのを公德と言う。二つとも、人が生まれながらにして欠かすことのできないものである。中国は道德の發達が早くないわけではないが、しかし、私徳に比重が偏っていて、公德はほとんど欠如しているのである。社会の利益になるため、公私の徳をあわせて善を兼ね備える必要がある。道德の本源とは、万古にわたって変わることのないものであるが、その社会の文明程度の差によって、道德は同じものではない。社会の進歩の度合いに従って、ふさわしい道德が現われてきたわけであると梁啓超は言う。

ここで、注意したいことは、福沢諭吉、梁啓超とも徳に対しての觀念が非常に近いことである。定義といい、作用といい、特徴といい、兩者の思想はほぼ同じである。梁啓超は福沢諭吉の思想を吸収して、自分の国の實際に即して自分の国なりの問題を考えていたのではないか。要するに、福沢諭吉と梁啓超は文明進歩のため同じ方法を見つけ出したと言えよう。

しかし、よく考えてみれば、二人ともなぜ社会の文明進歩を強調するのか、あるいはなぜ自分の国の文明を進歩させようと思うのか。この質問を理解する手がかりはやはり二人の文章であろう。福沢諭吉は『文明論之概略』の第十章で、文明の進歩が必要な理由を詳しく述べた。日本の国民は西洋の

国と接触し、日本の文明が西洋の文明より遅れていることを知り、文明の遅れている国は先だつ国に制せられる現象を知り、自国の獨立の可否のことを考え始めた。欧米人は貿易などのためアジアの諸国に來たが、その国の權利と利益を無視して一國の獨立を保つこともできなくなった。例えば、インド、ミャンマーなどは西洋の殖民地になつており、中国ももうすぐ西洋人の支配地になるということは福沢諭吉の觀察後の意見である。日本はまだ欧米人に侵略される段階に達していないけれど、東洋のほかの国と同じにならないように、自國の獨立を保たなければならない。その手段は文明の進歩のほかにはない。「今の日本國人を文明に進めるは、この國の獨立を保たがためのみ。故に、國の獨立は目的なり、國民の文明はこの目的に達するの術なり。」と福沢諭吉はまとめていた。⁽²³⁾

一方、梁啓超の國家を進歩させる理由は「新民說」の緒論の最後の節で優勝劣敗の理に従つて新民の結果について論証し、さらに適切な方法を選ぶべきであるという題名で論じられる。梁啓超は地球上の民族を五つに分けて、今の世界で最も大きな勢力を持っているのが白色人種であり、特にイギリス人とアメリカ人であると言う。世界は進化競争の原則に則つて發展していき、進化競争の原則はすでに人類を接触、交通、競争せずにはいられないように駆りたてている。いったん接触、交通、競争をすれば、強く立っているものと倒れてし

まうものが現れてくる。英語は一八〇一年から一八九〇年までの間に使う人数が世界上で第五位から一躍第一位になった。この番付けを見ると、全地球を呑むような氣勢をもつイギリスの強さが分かる。我々は世界の進化の通例を逃れられないので、もしアジア人をして白人よりも優れ勝るように更新できるようにすれば、いつの日か同じように興隆の時を迎えるであろうと言う。

以上の二人の意見を対照してみると、福沢諭吉は日本が西洋の国に抑圧されないように、西洋のような獨立した文明社会にならなければならないと考えている。彼の言論では、西洋に対してマイナスのイメージを持っていて、特に欧米人のアジア諸国に対する不平等な行為が不満であると読み取れる。それに対して、梁啓超は優勝劣敗の進化競争の原則を信じて、中国がイギリスやアメリカのような強い国になるために、国民を向上させなければならないと考える。彼の論説のなかでは、西洋に悪感を持っておらず、反して欧米の国にかなり憧れていると感じられる。この視点の違いは、二人の生涯や西洋遊歴の見聞に関係があるのではないかと私は思っている。福沢諭吉は一八六〇年から一八六七年までに、初めは使いとして、次に通訳としてアメリカへ二回、遣欧使節の一員としてヨーロッパへ一回、あわせて三回の西洋遊歴の体験を持っていた。西洋の近代的な諸制度や文物を実際に見ただけで

はなく、途中通過した香港、シンガポールなどイギリスの殖民地になったのアジアの人々の状態を見て、非常な衝撃を受けた。例えば、一八六二年に香港で観察したことが「西航記」で以下のように述べられている。

香港の土人は風俗極めて卑陋、全く英人に使役せらるゝのみ。或は英人と共に店を開き商売するものあれども、此輩は多くは上海広東より来るものにて、元と本港の土人にあらず。又港内に小舟数千あり。英人之を「チャイナ・ボート」と唱ふ。長さ大抵二十尺余、巾之に称風。其製甚だ粗なり。土人此舟に乗り、或は釣魚し、或は網を以て水底に落ちたものを拾ひ、或は食物雜貨を売て生産を為す。而して陸上別に住家なく、家族共に此舟に住して家となせり。⁽²⁹⁾

福沢諭吉の目で見た当時の香港はイギリス人に抑圧されたところであり、香港人は貧しく愚かな未開の野蛮人であった。香港人は自分の土地で立ち上がる所に探せず、海に住むしかなかった。虐げられた殖民地の人々の姿を見た福沢諭吉は自分の国家に関する危機感を持ち、圧制される可能性を防ぐため、国家を獨立させずるしかない。その手段は日本の文明を進歩させることであろう。

一方、梁啓超は日本に亡命した後一八九九年から一九〇三

年まで、変法を提唱する運動家としてハワイとオーストラリアへ一回ずつ行き、見学者としてアメリカへ一回行った。アメリカの旅での見聞を整理し、『新大陸遊記』という本が出版された。彼も途中でインド、香港などのアジア諸国に立ち寄ったが、イギリスに支配された土地に悪いイメージを持たなかった。むしろ、香港は中国より良いと感じたと言っている。『新大陸遊記』では、アメリカに到着した時の感慨を次のように記した。

中国内陸から香港、上海に来た私は、視野が変って内陸は卑しく語る値うちがないと思う。日本に来て、また視野が変って香港、上海は卑しく語る値うちがないと思う。海に渡って太平洋沿岸に来て、また視野が変って、日本は卑しく語る値うちがないと思う。さらにアメリカの東部に来て、また視野が変って、太平洋沿岸は卑しく語る値うちがないと思う。⁽²⁶⁾

この文章を見れば、梁啓超は殖民地や半殖民地で存在していた欧米列強の非人道的な行為に全く関心を持っていなかったことが読み取れるが、かえって相対的な視点を持って先進的西欧の国に憧れていたと言えよう。中国が今の遅れている状態を脱け出すために、先進的西欧の国と並立する努力しな

ければならない。その方法は国民を更新させることである。西洋人に対する視点の違いは二人の文章の多くのところでも窺える。『文明論之概略』の第一章では議論の本位を定めるにいて論じ、当時の頑固なる士民や学者流の人も外国人に悪い印象を持っていたということに触れた。その理由は、前者は外国人を異類のものと思い、後者は外国人の日本人に対する不公平の行為があるからである。福沢諭吉自身もその学者流の一人であるに違いない。また、自国の獨立のことを提唱する際、イギリスの東インドの支配地に対する無情残酷な行為の例がたくさん挙げられ、自分の国はインドの状況を印鑑としてよく見ておくべきものだ指摘した。

それに対して、「新民説」のなかで、異民族の侵入や、国家の亡滅を防ぐため、国民を更新させる必要があるという論もあるが、優勝劣敗の理により西欧の国のように強国として世界に立ち、国民を更新させる必要に比べれば、それほど強調しなかった。新民のことを提起する際、国民の弱点を検討しながら、西洋人の優点を付け加えられる部分が少なくない。例えば、「論自由」では、世界の民族のなかで、最も服従の性質に富むのは英人であり、最も多く自由の幸福を享受するのも英人であると指摘した。さらに、「論自尊」では、自尊を持っている人は必ず謙虚な君子であり、その人は西洋で *Gentlemen* と呼び、他人と交際するとき、穏やか・素直・恭し

い・質素・謙遜の五つの徳を表し、例えば、命令するとき、必ず please と言い、依頼するとき、必ず thank you と言うと西洋人の行為を肯定的に説明した。

これを見れば、西洋人に対する梁啓超と福沢諭吉の考え方はかなり違ふと見られる。これによって、啓蒙活動の出発点もずいぶん異なってきたと分かる。その動機が違ふとすれば、二人の啓蒙活動の特色も違ふと考えられるだろう。

終わりに

梁啓超は三度の海外滞在を除き、日本におよそ一四年間滞在し、一九一二年に三十九歳で中国へ帰った。日本の文化と人情に好感を持った彼は、滞在中、日本の書籍をたくさん読んで西洋思想の吸収に努めただけでなく、知らず知らずのうちには明治の文化と思想を受け取った。梁啓超は横浜で『清議報』、『新民叢報』、『新小説』の雑誌を創刊し自国の問題に対応し啓蒙運動を展開でき、雑誌を通して活発に言論を発表することができて、その意味で、日本に滞在の機会にめぐまれて、梁啓超は中国の啓蒙運動家の重要な役割を果たしたと考えられるだろう。また、「新民説」のなかで強調された徳と智は福沢諭吉の思想に影響を受けたと推論して差し支えないであろう。しかしながら、西洋に対する視点が違ふので、二人の啓蒙活動の目的にはずれがあると見られる。

注

(1) 康有為(一八五八一—一九二七)思想家、政治家、学者。字は広廈、長素と号した。広東南海の人。早くから改革思想を抱き、北京、上海に塾を開き、梁啓超はその門下の学生の一人だった。一八九八年、清光緒帝の信任を得て、変法維新の指導者となった。戊戌変法は一八九八年に康有為、梁啓超ら変法派によって行なわれた変法自強の改革運動であり、変法運動あるいは百日維新とも言う。その新制は僅か百日ばかりで西太后を頂点とする宮廷保守派の反発に遭い、戊戌変法の名で知られる九月クーデターでもろくも挫折を余儀なくされる。

(2) 『時務報』は清末上海で発行された旬刊(十日ごと)の雑誌である。社主は汪康年や黃遵憲、主筆は梁啓超である。一八九六年七月一日に創刊され、一八九八年六月二十一日第69号で停刊された。内容はもっぱら改革の急務を唱え、日清戦争の後から戊戌変法の前ごろまで、改革提唱のために、最も重要な役割を果たした。

(3) 『清議報』は日本横浜で発刊された旬刊の雑誌である。社主は梁啓超、麦孟華である。一八九八年十二月二十三日に創刊され、一九〇一年十二月三十一日に火災によって停刊されるまで、合せて百期が出版された。刊行の目的は中国人に知識を増やし、日中西国の情報を交流させることなどである。後に、中国の民衆の知恵を導くという主旨に改めた。

(4) 『新民叢報』は清議報のあとをうけた半月刊の雑誌である。主筆は梁啓超である。一九〇二年二月八日に創刊され、一九〇七年十一月二十日に停刊された。西洋近代の政治思想を紹介し、民権を提唱し、留学生はじめ当時の中国思想界に大きな影響を与えた。

(5) 「新小説」は日本横浜で発刊された月刊の雑誌である。社主は梁啓超、編集者は韓文举、馬君武などである。新民叢報社に属し、一九〇二年十一月十四日に創刊され、一九〇五年一月第二四号を最後に停刊された。文学作品、特に小説を通して、社会を批評し、国民に新しい思想を植えつけるという目的があった。

(6) 丁文江『梁任公先生年譜長編初稿』 世界書局 一九五九年 八二頁。

(7) 梁啓超『清代學術概論』(『民国叢報』第一編6 上海書店 一九九二年 一四〇—一四二頁)。

(8) 注(6)に掲書 二〇八頁。

(9) この分野での最初の研究として中村忠行の一連の論文、『新中国未来記』考説——中国文芸に及ぼせる日本文芸の影響の一例』(『天理大学学報』一号 一九四九年)や『政治小説に於ける比較と交流』『文学』(岩波書店 一九三五年)などが挙げられる。

(10) 青木功一「福沢諭吉・朴泳考・梁啓超の新民論」(『福沢諭吉年鑑』3 一九七六年)や夏曉虹著『覚世与伝世——梁啓超の

文学道路』(上海人民出版社 一九九一年)などが見られる。(11) 梁啓超の日本亡命の経緯は、次の論文を参考にした。

増田渉「梁啓超逃亡日本始末」張良澤訳『大陸雜誌』第三七卷 第一一、一二期合刊 一九五七年十二月。

彭澤周「関於康、梁亡命日本的検討」『大陸雜誌』第41巻 第8期 一九五九年十月。

(12) 注(6)に掲書 八二頁。

(13) 吳其昌「梁任公先生別録拾遺」『子馨文存』下巻 独立出版社 一九四五年 四五六—四五七頁。(夏曉虹「梁啓超与日本明治文化」『覚世与伝世——梁啓超の文学道路』所収)。

(14) 注(6)に掲書 八七頁。

(15) 梁啓超「汗漫録」『清議報』5 第三五冊 一九〇〇年 二七六頁。

(16) 梁啓超「論学日文之益」『清議報』2 第一〇冊 一八九九年 五八七—五八八頁。

(17) 梁啓超「論學術之勢力左右世界」『新民叢報』1 第一号 一九〇二年 七六—七七頁。

(18) 梁啓超「日本維新二偉人」『新民叢報』2 第7号 一九〇二年 四頁。

(19) 梁啓超「飲冰室自由書」『飲冰室叢著』第一一種 台湾中華書局 一九四九年 七頁。

(20) 梁啓超「論教育当定主旨」『新民叢報』1 第2号 一九〇二年 二八頁。

(21) アンリ・ベルナール『東西思想交流史』松山厚三訳 慶應書房 一九四三年 二八四頁。

(22) 梁啓超『新民叢報』第一号 一九〇二年 広告紙頁。

(23) 福沢諭吉『文明論之概略』 岩波書店 一九九五年 二九七頁。

(24) 福沢諭吉『福沢諭吉全集』第一九卷 岩波書店 一九六二年 八一九頁。

(25) 梁啓超『新大陸遊記及其他』 湖南人民出版社 一九八〇年 四九九頁。

参考文献

単行本

(I) 日本語

・有田和夫「梁啓超——清末一知識人の意識——」『近代中国の思想と文学』東京大学文学部中国文学研究室編 大安株式会社 一九六七年

・アンリ・ベルナール『東西思想交流史』松山厚三訳 慶應書房 一九四三年

・飯田鼎『福沢諭吉』中公新書 一九八四年

・伊藤虎丸、祖父江昭二、丸山昇編『近代文学における中国と日本』汲古書院 一九八六年

・板野長八「梁啓超の大同思想」『和田博士還歴記念東洋史論叢』

大日本印刷株式会社 一九五一年

・小野川秀美「清末政治思想研究」みすず書房 一九六九年

・何幹之『近代支那文化思想運動史』日本青年外交協会研究部訳 日本青年外交協会出版 一九三五年

・慶應義塾編『福沢諭吉全集』第八、十九卷 岩波書店 一九六〇、六二年

・佐藤震二「梁啓超」『中国の思想家』下巻 東京大学中国哲学研究室編 勁草書房 一九六三年

・実藤恵秀『日本文化の支那への影響』 蜚雪書院 一九三五年

・鈴木正、下崇道ほか『近代日本の哲学者』北樹出版 一九九〇年

・東京大学中国哲学研究室編『中国思想史』 東京大学出版会 一九五二年

・野村浩一『近代中国の政治と思想』筑摩書房 一九六四年

・福沢諭吉『文明論之概略』 岩波書店 一九九五年

(II) 中国語

・何徳功『中日啓蒙文学論』 東方出版社 一九九五年

・夏曉虹『覚世与伝世——梁啓超の文学道路』 上海人民出版社 一九九一年

・盛邦和『東亜…走向近代的精神歷程——近三百年史学与儒学伝統』 浙江人民出版社 一九九五年

・陳應年「近代日本思想家著作在清末中国的介紹和傳播」『中日文化交流史論文集』 人民出版社 一九八二年

- ・丁文江『梁任公先生年譜長編初稿』 世界書局 一九五九年
- ・李喜所、元青『梁啓超傳』 北京人民出版社 一九九三年
- ・李澤厚『中國近代思想史論』 人民出版社 一九七九年
- ・馮友蘭『梁啓超底思想』『中國近代思想史論文集』 上海人民出版社 一九五八年

- ・劉邦富『梁啓超哲學思想新論』 湖北人民出版社 一九九四年
- ・梁啓超『清代學術概論』(『民國叢報』第一編6 上海書店 一九九二年)

- ・梁啓超『飲冰室叢著』第11種 台灣中華書局 一九四九年
- ・梁啓超『新大陸遊記及其他』 湖南人民出版社 一九八〇年
- ・Joseph R. Levenson『梁啓超与中国近代思想』劉偉、姜鉄軍訳 四川人民出版社 一九八六年

(11) 英語

- ・ Chang, Hao. *Liang Chi-Chao and Intellectual Transition in China, 1890 - 1907*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1971.
- ・ Huang, C. Phillip. *Liang Chi-Chao and Modern Chinese Liberalism*. Seattle and London: U of Washington P, 1972.

雜誌

- ・『清議報』1-12 成文出版社 一九八九年十二月-一九〇一年十二月 第1冊-第100冊 旬刊
- ・『新民叢報』1-17 藝文印書館 一九〇二年二月-一九〇七年十一月 第1号-第96号 半月刊

論文

- ・青木功一「福沢諭吉・朴泳考・梁啓超の新民論」『福沢諭吉年鑑3』 一九七六年
- ・斎藤泰治「梁啓超「自由書」と「新民說」『教養諸学研究』第97、98合併号 早稲田大学政治経済学部 一九九五年
- ・張美慧「亡命中の梁啓超に影響を及ぼした人物」『アジア文化』第13号 一九八八年